

人間崇拝の禁止

パウロはいったい何者か、アポロはいったい何者か

すでに見たように、コリントの教会の信徒たちの中には「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」と、互いに分派を形成し争うということが起っていた(1:10以下)。使徒パウロはそこに、神に属する栄光を人間に帰して崇めようとする彼らの人間崇拝の罪を見た。しかもその分派が自分の名前により形成され、栄光が自分の名に帰されていることを知ったとき、パウロは恐れとおのきをもって彼らに叫ぶ、「いったい、パウロは何者か！アポロは何者か！キリストにのみ属する栄光を、どうしてこの私に、そしてアポロに帰そうとするのか！」(1:13、3:5)。

使徒パウロにとって、その最高の、そして唯一の願いは、自分を召して下さったキリストの栄光に仕えて生きるということであった。彼はフィリピの教会あてに次のように書いている。

わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしがどんなことがあっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである。わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことも益である」(フィリピ1:20～21/口語訳)。

彼はキリストの「しもべ」として徹底して生きた。それ以外の何ものをも求めなかった。それゆえ、キリストにのみに属する栄光が自分に帰されるとき、彼は身震いするほどの恐れを感じ、そのようなことを許すことができなかった。「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くために、それぞれ主がお与えになった分にに応じて仕えているものにすぎない」(3:5) それなのに、どうして、このわたしに栄光を帰そうとするのか！！

ここで、あなたがたを信仰に導くために「仕えている者」にすぎない、と訳されているのは原文では「ディアコノス」で、食卓に仕える「給仕」を意味する語である(英語のdeaconの語源)。或る注解者は次のように訳している。「我らは、ただ、諸君が信仰に入るために使用された下僕にすぎぬ。その主人から与えられた分にに応じて労働した者にすぎない。．． 汝らの信仰の対象にあらずして、汝らの信仰の道具たるのみ」と。

パウロはさらに続けて言う、「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させて下さる神です。植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることになりません。わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです」(3:6～9)。

使徒パウロの言わんとすることは明白である。人の救いは徹底的に神の恩寵の御業であって、いかなる意味でも人間の側の努力(説教者の雄弁、学識能力等々)によるものではない。それゆえ、神だけがあがめられるべきであって、人間があがめられるべきではない。人間を高く祭り上げて、神に帰すべき栄光を、いかなる意味でも人間に帰してはならないのである。この使徒パウロの言葉に、私たちも真剣に聞きたいと思う。